

沢木などが付会されたものであろう。明治5年郷社となり、現在の例祭は7月1日である。

\*そえがわじんじゃ\*

副川(そえがわ) 神社。高岳山登山道入り口にある副川神社前殿。真坂東方にある標高221メートルの信仰上の山、高岳山。その山頂に日本最北の式内社の副川神社本宮が鎮座しています。登山口には前堂があります。祭神は、須佐男命(スサノウミコト)ーヤマタのオロチ退治で有名。牛頭天王(コズテンノウ)、須佐男命とペアが、こちらが原型(天竺より渡来)。信仰は時代背景によって変遷されてきました。縁起は六世紀頃といわれています。

秋田藩主佐竹義格は、正徳年間(1711~16)中世を通じて廃絶されていた領内の二式内社を復活し、保呂羽山の波字志別神社を加えて国内三社として再編成しました。その際、現神宮寺嶽上に副川神社があったことをほぼ認めていましたが、佐竹氏は新たな趣旨のもとに高岳山に神社を鎮座させました。それはこの山が古くから霊域として崇敬されてきたからで、『秋田風土記』ではその様子について次ぎのように記しています。

「副川神社(秋田三国社の一つ)社領三十石、保呂羽本宮と云り。往年京都吉田家波和気社、塩湯彦、尋問の事有て、時の社寺奉行茂木定右衛門奉命て、秋田山本両郡副川神社を普く尋らる。然とも其社迹知れず。

滴々此村にて此霊山を見る。村老に問、老の日、はたら沢と云、旧保呂羽山と云。其故に山一ツにして八沢あり、是八沢木と云フ、山上に小社ありと、其村夫を先登として山へ至り見るに、冥双の霊地、又保呂羽の本宮なる事を察し、聴に達し則副川の神社とし茂木氏宮を建」と記している。

頽廢していた社殿を修築し社領30石を寄進し、中の鳥居に秋田・山本奉行がそれぞれ常夜灯を寄進しています。江戸時代は潟西岸に高岳山講中があり、また大館、二ツ井、能代、琴丘、秋田市の新城にもありました。ここには、湖上を舟で往来して山頂に参詣していました。

近世に入って、作神様として近郷近在から参詣者も多く、虫札(神大文字でソイガワジンジャと書いてある)とっている御札をもらい、茅に縛って、田の水口に立て、稲の病気と虫除けの守り札としていました。昭和10年代には、田の水口にひらひらしているお札があちこちで見られたそうです。

献上額として、農作業額と文政13年(1830)の連歌額があり、連歌額には

神の威仁 木の間木の間野あな 涼し

むすぶ清水の あらたまる音

拍手の はずみを稚の ほろろかな

等があります。

現在祭典は7月1日(山の祭り)山頂で10時頃お祈りと巫女舞いが行われます。5月5日には、子供達の梵天・お神輿奉納などが行われています。

“菅江真澄も歩いた歴史の道「羽州街道」”から

NTT東日本秋田支社

\*\*\*\*\* 夕 行 \*\*\*\*\*

## ダイワン 台湾

\*ダイワン\*

下川原地区を昔から「ダイワン」と呼んでいる。一説には『戦後台湾から引揚げた避難民が多く住んでいたため』というのが本当かどうか。五城目町にも「ダイワン」「カバフト」と呼ばれていた場所があり、それぞれ台湾、樺太からの引揚者が住んでいた場所だと言う人がいる。他方、引揚者が来る前からそう呼んでいるという人もいた。一日市神社の近くにある、下川原へ繋がる電信柱に「台湾線」と書かれたプレートを見つけた。忘れられる地名が消えずに残っていた。

作者

\*「ダイワン」と「カバフト」\*

五城目町には「ダイワン」「カバフト」という俗